



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

CITATION:

あとがき. 東南アジア研究 1965, 3(2): 159-159

ISSUE DATE:

1965-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55072>

RIGHT:

あ と が き

遅ればせながらも、やっと「東南アジア研究」第3巻第2号をお届けできることになりました。官制化を見た東南アジア研究センターは、その後も従来にましてダイナミックな活動を続けている。そして、センターの着実な活躍と成果とをそのまま如実に反映するのが、この季刊「東南アジア研究」である。センターの活動が深まるにつれて、本誌の内容も充実し、すでに先号あたりから、誌面全体が現地調査の成果で埋められるようになった。このことは大いに注目に値すると思う。本号に寄せられた論文や報告も、大部分がやはり現地研究を踏まえて書かれたものであり、この傾向は、これからの本誌のありかたを決定的に示していると思える。

本号は、従来と同じく、論文・報告・現地通信・文献紹介を主体として構成されているが、第2巻第1号で試みた文献解題の欄を復活させてみた。できたら、今後ともこの試みは続けてみたいものである。暑い夏の休みに、本誌のためにわざわざ執筆賜った諸先生がたに厚くお礼を申し上げたい。とくに、生活環境に恵まれない調査研究の現地から、貴重な現地通信を寄せてくださったジュニアの皆さんには、心から謝意を表したい。

本号では、印刷会社が、これまでの中西印刷から明文舎にかわり、明文舎の伊藤専務にいろいろご厄介になった。印刷会社が変わったのは、センターの官制化に伴い、センター出版物の出版のやり方がかわって、大学本部の出版物に準ずる仕方、入札制度が導入されたためである。これは、センターの現段階ではやむを得ないことだとは思いますが、本誌のような学術的性格の出版物には、基本的に不向きな制度ではないのだろうか？ 印刷会社に落札が決まったあと、校正段階で入札の条件にはずれた編集者のわがままをいろいろ聴きいれてくださった本部およびセンター事務室のかたがたには感謝の意を表したいが、今後センターの出版物を発行する上で同じような問題がくりかえし生ずることは疑いなく、もう少し柔軟な制度的配慮がなされるよう希望することは許されないだろうか？

編集業務はもっぱら矢野が担当したが、原稿依頼に御協力いただいた三谷恭之氏、校正段階で連日お手伝いくださった文学部学生古川康夫君、および絶えず編集子を叱咤激励くださった本岡武教授、石井米雄助教授らのお心遣いにたいして、心からお礼申し上げたく思う。これらのかたがたの御力添えにも拘らず、不完全な個所をいくつか残してしまったが、すべては直接編集を担当した矢野の責任である。お許しを乞いたく思う。

(編集担当：矢野 暢記)

執 筆 者 紹 介

足 利 惇 氏	京大・文・名誉教授、東海大・文学部長	飯 島 茂	京大・東南ア研・助手
水 野 浩 一	京大・東南ア研・研修員	坪 内 良 博	京大・東南ア研・研修員
築 島 謙 三	東大・東洋文化研究所・講師	小 林 一 三	京大・農・大学院
松 尾 新 一 郎	京大・工・教授	福 井 捷 郎	京大・農・大学院
吉 住 永 三 郎	京大・工・教授	前 田 成 文	京大・文・大学院
泉 井 久 之 助	京大・文・教授	相 良 惟 一	京大・教育・教授
藤 本 勝 次	関西大・文・教授	福 島 徳 寿 郎	京大・法・教授
吉 井 良 三	京大・教養・教授	石 井 米 雄	京大・東南ア研・助教授
岡 正 雄	東外大・A A言語文化研・所長	南 勲	京大・農・助教授
猪 木 正 道	京大・法・教授	三 谷 恭 之	京大・文・大学院
本 岡 武	京大・東南ア研・教授	桂 満 希 郎	京大・文・大学院